

(今日、どうしよっかな)

口と、冷凍食品を詰めただけのお弁当を往復する箸。
考えごとを始めると味がぼんやりしてくる。

(最近だと乳首焦らし勃起動画が人気あったなあ。やっぱり乳首が特に好きって人がいるんだろうな)

しなしなのほうれん草を運び、

(下着越しの勃起クリ、爪でカリカリするのも伸びたな～。あれはモザ無しでいけるのがいいんだよね。想像を掻き立てられるし…)

ブラックペッパーの効いた唐揚げを運び、

(お風呂吸盤ディルドも良かったけど、あれはカメラのセッティングが大変。またやるんだったらちゃんとした三脚買わないと)

冷えたお米を運ぶ。

口を動かしながら周りに人がいないことを確認して、私はこっそりSNSを開いた。

『アカリ』と名のついたアカウント。

これは私が趣味でやっている、いわゆる「裏垢」だ。『アカリ』はもちろん偽名。本名とは全然関係のない名前にしてある。

いくつかの通知を確認し、最近の動画を遡った。

そういえばここ数日、挿入系の動画はあげていない。

新しく買ったディルドもオナニーには使ったものの、動画にはしていなかった。

(今日はそれ撮ってみようかな)

SNSを閉じ、どんな体位で撮ろうか、オカズはどうしようか、などとぼんやり考えながらお弁当を食べ進めた。

——けれど。

急に上司からご飯に誘われ、撮影どころではなくなってしまった。

私のことを日頃から可愛がってくれる、須藤（すどう）さん。

他の人だったら誤魔化して断っても良かったけれど、須藤さんは別だ。

良くしてもらっている以上、無碍にはできない。

まあ、動画はいつでも撮れるし。

今日は大人しく欲だけ溜めて、また明日撮影しよう。

連れて行かれたのは個室のある居酒屋だった。

誘われたのは私だけではないらしい。

私のいくつか下の後輩、千尋（ちひろ）くんも一緒だ。

和風の店内。

ガタついた木の引き戸で区切られた個室。

私は千尋くんと並んで座り、須藤さんは向かい側に座った。

向かいに座った須藤さんは、三十代後半とは思えないほど若々しい、けれど年齢相応の落ち着きと貫禄を持つ

た人だ。

がっしりとした体格で肩幅も広く、きっちりと着こなしたスーツがよく似合う。

黒髪は短く整えられていて清潔感があり、堀の深い濃い顔立ちには、少し近寄りがたい雰囲気もあった。

でも、私にはいつも優しくしてくれる。

仕事で困っていると察して声をかけてくれたり、的確なアドバイスをくれる。

他の同僚の中には、須藤さんのことを怖いと言う人もいるけれど、私は須藤さんをそう思ったことはなかった。

私の右隣にいる千尋くんは、須藤さんとはまるで違うタイプだ。

かなり長身の千尋くんは、肩幅はしっかりしているものの細身でしなやかな体つきをしている。

ほんのりとブラウンがかった髪はふわりと柔らかく、少し垂れた目も相まってどこか甘い雰囲気のある人だ。

笑うとさらに甘さが増すので、女性社員からも人気がある。

私にとっても、話しかけやすい感じのいい後輩だ。

食事をしながら、私たちの会話は仕事の話が中心だった。

何か社内では話せないことがあって誘われたのかと思ったけれど、そういうわけではなさそうだ。

たわいもない会話が進み、私も勧められるがままお酒を飲んだ。

ふわふわ、気持ちがいい。

会話もゆるみ、くだけ、須藤さんと千尋くんとの距離が近くなった気がしてしまう。

「二人は若いんだから、そういう機会もたくさんあるだろう？」

須藤さんがグラスを傾けながら言った。

話題はもう、明らかに同じ会社の人たちとするような話題ではなくなっていた。

「そんなことないですよ」

千尋くんが笑って答える。

この流れを不快に思っている感じはない。

私も不快ではなかった。

むしろ、興味…、いや、好奇心？で、胸が高鳴ってい

た。

「じゃあ千尋は自分で処理してるのか。それも寂しいだろ～。どうしても相手がいないとできないこともあるし」

「まあ、そうですね」

男性のオナニーの話だ。私には未知の世界。

ちらりと隣の千尋くんを見る。こんな甘い顔して…、どんなふうにおナニーするんだろう。

この顔が射精に歪むのを見てみたい気もする。

「キス、好きか？こればかりはおナニーじゃどうしようもない」

「好きですよ、今は相手いないですけど」

「ふーん……。じゃあ今ここで、二人でしてみろよ」

「……？」

いきなり飛んできた言葉に私は固まった。

須藤さん、今なんて？

「そんな…、オレは先輩なら大歓迎ですけど、先輩が嫌ですよねぇ」

あれ？

千尋くんまで何を言ってるんだろう。

二人が私を見ている。

なに、この流れ。この空気。

私が答えないといけない。

上司の前で、後輩とキスするのかわかって。

「……………、嫌、ではないです、」

体を微動だにせず答えた。

だいぶ酔っていることを自覚する。

「ほら千尋、嫌じゃないんだと」

「本当？嬉しいです」

途端に隣の千尋くんが体を寄せてきて、私は千尋くんと反対側へ体を傾けた。

反射的に逃げてしまった。

でも千尋くんに肩を抱かれ。

「じゃあ、してみましようか」

ゆっくりと顔が降りてきて。

ふわり、唇が唇に当たった。

一度離れて、またくっついて。

離れて、角度を変えてまたくっついた。

視界は千尋くんであっという間で、恥ずかしくて目を閉じた。

須藤さんがどんな顔でこれを見ているのかは分からない。

次に唇がくっついたら、今度は離れなかった。

触れたまま角度が変わり、唇に隙間ができる。

そこを埋めるように下唇を押し当てられ。

私は思わず千尋くんのシャツを掴んだ。

テーブルの向こうから須藤さんの声がした。

「そんなものでいいのか？舌入れろよ」

その声にぎゅっと閉じていた目を開けると、千尋くんと目が合う。

逸らすこともできない。

薄く千尋くんの唇が開いたかと思えば、舌が私の口内に入ってきた。

れ……、

私の唇を押し開ける舌。

れ、え、

中を進んでくる。

ぬぷ、

舌が一瞬引かれた瞬間、唇の内側をなぞられ、

ぬぷ、ぬぷ♡

また進んでくる。それを繰り返された。

ぞわ……♡

くすぐったくて、上半身が粟立った。

ぬ♡ぷう♡

口内で千尋くんの舌が蠢く。

れ♡ れ♡

舌先が口内の感触を確かめ、

れ♡ れろ♡ れろお♡

舌に重ねると、

ずり♡ ずり♡

擦るように動かされる。

「……っ」

千尋くんの体重が私の体にかかり、どんどん倒れていく。

大きな手に背中を支えられると千尋くんの体はさらに私に密着した。

酔っ払っているからだろうか、服を着ているのに体温を感じる。

千尋くんの舌も熱を持って、唇を深く重ねたまま私の舌に絡まった。

れ♡ れろ♡ れろ♡ れろお♡

「っ、あ、う」

ぬぷ♡ぬ、っ♡ れる♡ れる♡ れる♡

「…、ふ、うう、」

目は開けたままだった。

視界の千尋くんがぼやけている。

「……先輩、目がとろーんってしてきましたね。体の力も抜けてきたし」

唇を離さないままそんなことを言う。

視界の端で須藤さんも動いた。

千尋くんの舌を受け止めながら、須藤さんがこちらへ移動してくるのを感じる。

千尋くんとは反対側に座った須藤さんは、倒れかけていた私の体を受け止め、

「キス、好きなんだな。俺とはどうだ？」

顎を掬われると、須藤さんのほうを向けさせられた。

……まずい。

まずい流れになってる。

分かってるのに、抵抗する気になれない。

「あ、……む♡、」

須藤さんは最初から舌を挿じ込んできた。

分厚い舌が私の舌を追いかけて、絡みつき、外へ誘い出すように動く。

れる、れる♡ れちゅ♡

「ふ♡ う、……っ」

ぬろお♡ ぬぶ♡ ぬ、ぢゅ…っ♡

「っ、あ♡ ……、っ♡」

抵抗しなくちゃいけなかったのかも。
でも、キス、気持ちよくて……。

もじもじと動かす足の間で、触られてもいないクリトリスに血が流れ込むように硬くなっていく……♡♡♡

「先輩、オレともキスしてほしいんですけどー…♡ しょうがないなあ♡」

私の肩を抱いていた千尋くんの腕が体を滑る♡
手のひらが肩や腕、背中やお腹を撫でて、胸を包んできた♡

ぴくっ♡

膨らみの先端を優しく撫でられて体が跳ねる♡
耳元で千尋くんが小さく笑ったのが聞こえて、その手は何度もそこを往復した♡

「…っ、♡ ん、♡う♡」
「抵抗しないんですね、やっぱり先輩ってえっちなこと好きなんですか？♡」

……好き、に決まってる。

でもそんなこと言えない。

自分のオナニー動画をネットに上げて興奮してる変態だなんて、言えない。

須藤さんの唇が離れると、須藤さんはギラついた目で私を見下ろしていた♡

「俺たちでたくさん気持ちよくしてやるから、場所移動しよう、いいだろ？」

キスされて、ちょっと触られただけで昂ってしまった体では、とても拒否なんてできなかった……♡

「——ッ♡ ん♡む、♡ んう♡ ……ふ♡ うッ♡♡」

ホテルの広いベッドの上♡

服は部屋に入ってすぐに、下着以外は二人がかりで脱がされてしまった♡

私だけがほぼ裸のまま、須藤さんの足の間に挟まれて、その胸に背中を預けている♡

横から覗くように須藤さんにキスをされ、前にいる千尋くんには、乳首にキスされていた♡

ちゅ♡ ちゅむ♡ れろ♡ れろれろ♡

上唇を吸われ、舌で歯をなぞられ♡

れられらぁ♡ れろん♡ れろん♡ ちろちろ…♡

舌先で乳首を転がされる♡

「…乳首気持ちいいか？♡ 俺も触ってやる♡」

須藤さんの指が私の左乳首へ移動した♡

千尋くんに舐められて硬くなった右側とは違い、まだなだらかな左を、人差し指と中指の腹で、

すり…♡

と撫でる♡♡

「……ッ♡♡」

肩が上がった♡

須藤さんは私の首筋に顔を埋めたまま続ける♡

今度は親指と人差し指の腹で、乳首の付け根から先端へ、

さわぁ…♡

と撫で上げた♡♡

さわ♡ さわ…♡

「っ♡ はあ♡」

指紋の感触まで拾ってしまいそうなほど♡

さわ、さわあ♡

「う♡ ん…ッ♡」

乳首が敏感になっている♡

さわ♡ さわあ♡ さわあ♡

「は♡ あ♡ ああ♡」

男の人を感じる硬い皮膚が♡ やわい乳首を勃たせるように撫で上げる♡

「これ、好きなんだろ、じーっくり勃たせるの♡ …乳輪からむくむく～♡って硬くなってくぞ♡」

「っ、…？♡」

須藤さんの言葉に、ほんの少しの違和感。

でも、それをさらうように千尋くんが乳首を唇で包んで、吸った♡

ちゅ…ッ♡♡

「んっ♡♡」

舌に乗せられたまま、唇で圧迫される♡

チリッと一瞬刺激が走って、そのあとはやわやわ♡と
揉まれた♡♡

さわ♡ さわ♡ さわ♡ さわ♡ さわあ♡
あむ♡む♡ はむ♡ あむ♡あむ♡

「あ♡あ♡ あっ♡ っ♡ …ツ、♡」

首筋に当たる須藤さんの息と体温がくすぐったい♡
指先で優しく撫で上げられ、唇で食まれる乳首が気持ちいい♡

さわあ♡ さわ、さわ♡ さわあ♡さわあ♡
あむ、んむんむっ♡ …ちゅぽ♡ ちゅ♡ ちゅ♡

「ふ、うう、……っ♡♡」

たまらなくなってもう体を振ると、須藤さんのもう片方の
手が下半身へ移動してきた♡

下着のウエストのゴムの部分を通り、土手を通って、
足の間へ手を差し込む♡

すぐに指先が布を撫でてきた♡

「ああ、もう下着もぐちょぐちょだ♡」

「…、あ♡ あ、待っ」

わざとらしく下から上へ移動してきて♡

「クリは…、ここか？♡」

「うあ♡」

クロッチの部分を押す♡

「ここまで湿ってきてるな…♡」

「あ、あっ♡ そこ、は…」

中指がクロッチ部分を引き上げて、人差し指がその下、
布越しのクリトリスを、

すりっ♡

撫でた♡

「ッ！♡♡」

指は止まらない♡

すり♡すり♡すり♡すり♡

クリトリスを狙って何度も上下する♡

「あ♡ あ、んっ♡ そこだめ、です♡♡」

「ん～？ ここ好きだろ？♡ …ああ、そうか、これじゃ弱い♡ カリカリされるのがいいんだもんな♡♡」

「え」

人差し指が角度を変える♡

硬い爪が♡

カリカリカリッ♡♡

「……ッッああ！♡♡♡」

クリトリスを摩擦した♡♡

その間も両乳首は二人に愛撫されつづけている♡♡

さわ♡さわ♡ さわあさわあ♡♡ すり…っ♡
ちゅ♡ちゅむ♡ ちゅむちゅむ♡ はむ♡ あむ♡
カリカリカリッ♡ カリカリカリッ♡

「うあ♡ あっ♡ ああッ♡ これだめ♡ カリカリ、よ
わい…♡」

「そうだよな、直接触る前にこうやって焦らして勃起さ
せるの好きだもんな♡」

「乳首ももうビンッビンですね♡ フル勃起乳首をしつ
こく吸われるの、それだけでイけちゃうくらい大好き
ですもんねー♡」

……なにかおかしい気がする、のに、
そんなこと考える余裕がない♡

さわあさわあ♡ すりすりすり♡ さわあ♡♡さわあ
♡♡

ちゅぷっ♡♡ ちゅ、ちゅ、ちゅぷっ♡♡ ちゅッち
ゅッ♡

カリカリカリッ♡ カリカリカリッ♡ カリカリカリ
ッ♡

自分じゃない、他人の手で勃起させられた乳首とクリトリスはどんどん敏感になっていく♡

全部の感覚を拾おうと研ぎ澄まされ、体に次々と刺激を送ってきて、足がバタつくのを止められない♡♡

「…う、あ♡ あッ♡ 待って、だめです、イっちゃう…！♡♡ こんな、あ♡♡」

「いいぞ、イケ♡ 俺たちにイかされる♡♡」

「見せてください♡ 先輩がいくところ♡」

「あ、う…！♡♡ ん、ッ、あっ、あ♡♡」

須藤さんの腕の中で体が強張り、カタカタと震えた♡
♡

ひたすらに乳首とクリトリスを愛撫され、体のあちこちまで気持ちいい感覚が走って♡♡

さわさわさわ…あ♡♡ すり♡すり♡すり♡すり♡
ちゅッ♡♡ ちゅうううっ♡♡ ちゅぷちゅぷちゅ
ぷっ♡♡

カリカリカリッ♡♡ カリカリカリッ♡♡ カリカリ
カリッ♡♡

「……う、イクっ♡♡ イくっ、……う、んンン…っ

っ！！♡♡♡♡♡」

「イってるイってる♡ でもまだだぞ～♡♡ イキクリ
もっとカリカリしてやる♡♡」

「あ…ッ！♡♡」

絶頂に跳ねる体を須藤さんに強く抱きしめられ、指は
動き続けた♡♡

ピクピク痙攣する勃起クリトリスの先端を集中的に搔
かれ、敏感になった乳首は千尋くんの唇に小刻みに潰さ
れる♡♡

カリカリカリカリカリ…ッ♡♡

ちゅむちゅむちゅむっ♡♡ ちゅむちゅむちゅむっ♡

♡

「ああッ、あッ、ほんとにだめ！♡♡ イってるのに…
！♡♡ うアッ！♡♡ あああっ！♡♡♡」

「もっとだ♡ もっと気持ちよくなっていいんだぞ♡♡
自分で手加減できちゃうオナニーと違って、俺たちは
手加減してやらないからな♡♡」

「あは♡ フル勃起乳首♡♡ えっちすぎ♡♡♡」

カリカリカリカリ…ッ♡♡ カリカリカリカリ…ッ♡

♡

ちゅむちゅむちゅむっ♡♡ ちゅむちゅむちゅむっ♡
♡

「……〜〜〜〜〜ッッ！！♡♡♡♡♡」

勝手に跳ねる体♡♡

クリトリスは熱を持ち、乳首は脈打つのが分かるほど
敏感になる♡♡

「ほん、と、だめえ…！！♡♡♡♡ うあ、アッ、ああ
…！！♡♡♡♡ あ、うそ、やば、い……！！♡♡♡♡
♡」

カリカリカリカリ…ッ♡♡ カリカリカリカリ…ッ♡
♡

ちゅむちゅむちゅむっ♡♡ ちゅむちゅむちゅむっ♡
♡

絶頂を超えた体が、昂り続け痙攣する♡♡

次に、お腹の下、ふわりと一瞬軽くなり、めまいがし
て♡

「う、…………ふう、う、ゆ♡♡♡♡♡」

しよろ……♡♡♡

漏らしてしまった♡

下着が濡れ、その下のシーツも濡れていく♡♡♡

「…はは、漏らしちゃったか、ここまでイけるとはな♡
♡」

「見せてください先輩♡ 連続アクメしてお漏らししちゃった生まんこ見一せて♡♡」

「は、……あ♡ あ、あ…♡♡」

体に力が入らない…♡

失禁自体は経験がある♡

おもちゃを使ってしつこくいじるとそういうこともあるし、自分でそう責めるのが気持ちいいときもある♡
動画にもした♡♡

でもこんなに…、体の中から真っ白になってしまう大きな絶頂は経験がなかった♡♡

私がぼーっとしている間に千尋くんは下着を抜き取ってしまった♡♡

「マン穴ヒクついてて可愛い♡♡ 指入れますね…♡」

「…あ、うッ♡♡」

私の愛液で濡らした千尋くんの指が二本、ゆっくりと入ってくる♡

連続でイったおまんこには強い刺激だ♡♡

「おいおい、だめとか言ってた割に自分で足開いちゃってるじゃないか♡」

「先輩、こうですか？♡ これくらいの角度…？♡♡
あ、締まった♡♡」

中の具合を伺うように進み、おまんこの上側に指の腹を添えられた♡

それだけで湧き上がるような快感が、じんわりとおまんこ全体に響く♡♡♡

…怖い♡♡

イったばかりのおまんこを、また気持ちよくされるのかと思うと♡♡

「次は中で気持ちよくなってみましょうね♡♡」

「……っ♡♡♡」

その言葉に、須藤さんの腕にしがみついたのと、千尋くんの指が動いたのは同時だった♡♡

ちゅこ、ちゅこちゅこ、ちゅこちゅこちゅこ…っ！！
♡♡♡♡

「……ッッ！♡♡ んおッ♡♡ おおっっ！♡♡♡」

一気に押し寄せた強い快感に喉も締まる♡♡♡

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっっ！♡♡♡
「っ！♡お、おッ！♡♡ や、あッ、♡♡♡」
「あ———……♡♡ 先輩のおまんこが感じてるの、ハッキリ分かります♡♡」

ちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこちゅこっっ！♡♡♡
「いった、のに！♡♡ こんな、…ッお♡♡ ほお…！
！♡♡♡♡」

「でもこれが好きなんだもんな？♡♡ 自分じゃできない責められ方で責められるのがいいんだもんな？♡♡♡
ほら、乳首も一緒にしてやるよ♡♡」

カリカリッ♡♡ カリカリカリカリカリッ♡♡♡

「う……ッッ！！♡♡♡♡♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ！♡♡♡

おまんこごと揺らすように千尋くんの指が振動し♡

カリカリカリカリカリッ♡♡♡カリカリカリカリカリ

ッ♡♡♡

勃たせた乳首をくすぐるように須藤さんの指先が小さく弾く♡

「…ッだめ♡♡ お、おッ、♡♡♡ ふおッおおお！♡♡♡」

「おまんこのザラザラ、オレの指に押し付けるみたいに閉じてますよー♡♡ おまんこが気持ちいいって言う♡♡♡」

「勃起乳首もいっぱい気持ちよくなろうな♡♡ カリカリして敏感になったあとは♡ おら♡指立てて♡爪先で♡ ふわあ♡ふわあ♡って♡♡♡」

「お♡♡お♡♡お♡♡ や、ば…ッ

！♡♡♡ ほおおッ♡♡♡」

気持ちいい感覚が♡♡

逃がそうと思っても逃せない、何度も何度も波のようにお腹の奥から体の隅々まで流れ込んで♡♡

「……おおッ♡♡ おおおっ♡♡♡ また、イっちゃう、こんな…♡♡♡」

突っ張っていた足がカクカクと情けなく震えてしまう



千尋くんは背中を丸めて私の足の間に顔を埋めた♡♡
唇で小さなクリトリスを包んで、

ツツぢゅ〜〜〜〜♡♡♡♡♡

吸った♡♡

「お…………ツツっ！！♡♡♡♡♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ！♡♡♡
カリカリカリカリカリッ♡♡♡カリカリカリカリカリ
ッ♡♡♡

ぢゅ〜〜〜〜っ♡♡♡ ぢゅ〜〜〜〜っ♡♡♡

「おツツ、おツ、おおっ、だめえ、イクっ、！！♡♡♡
イ、く…！！♡♡♡♡」

「イけイけ♡♡ 乳首もまんこもクリも気持ちよくされ
てイけ♡♡♡」

ぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこぢゅこっ！♡♡♡

カリカリカリカリカリッ♡♡♡カリカリカリカリカリ
ッ♡♡♡

ぢゅ〜〜〜っ♡♡♡ ぢゅ〜〜〜〜〜っ♡♡♡

須藤さんの腕の中でのけぞって♡♡♡

「イ、……、ほ、お、おおおおおお！！♡♡♡♡
♡」

びく♡♡ びく♡♡

どくん♡♡♡

いった♡♡♡

体が一際大きく揺れて、
それから一気に力が抜けた…♡♡

ぐったりと須藤さんにもたれる私の足首を、千尋くん
が掴んで引いた♡

体勢が崩れベッドへ寝かされる♡

「先輩のおまんこパクパクしてる♡♡ おまんこ埋めて欲しいんですよね♡♡♡ もう指だけじゃ足りないでしょう？♡」

私の足の間で千尋くんのベルトの金属音が鳴った♡

ああ…、おちんぼ♡挿れられてしまう♡♡ 後輩おちんぼが♡♡

……なんだっけ、さっき感じた違和感みたいなの、あった気がするのに。どうでもいいんだっけ？

絶頂を繰り返したら忘れてしまった…♡♡

「お前もうちんこガチガチだな」

「こんな先輩見たらこうなりますよ。…先輩、もういいんですよね♡ 拒否しないみたいだし♡♡」

千尋くんの膝にお尻を乗せられ、少しだけ彼が膝を立てると、

ぷちゅ♡ ぐちゅ…♡♡

濡れた入り口をおちんぼの先が割り♡♡

ぬぢゅ…♡♡ ぬちゅう…♡♡

ゆっくりと私の中を進んできた♡♡♡

「ん♡ ああああ…っ♡♡♡」

体の中をなぞられる感覚に腑抜けた声が漏れる♡♡

やっぱり足が勝手に開いてしまう♡

恥ずかしげもなく、会社の後輩に向かって無防備なおまんこを晒してしまう♡♡

ぐぢゅ♡♡ ぐぷ♡ぢゅ♡♡ …ぐぢゅんっ♡♡

厚い亀頭が探るように動いて、奥に到達した♡♡

「っ、はあ♡♡」

千尋くんも力を抜くように息を吐いて、それから、

「先輩のおまんこ狭あ…♡♡ 日頃からあんなにおもちや挿れてるのになんでこんなに狭いんですか♡♡♡」

と言った。

「え…？」

目を見開く私。

「あ〜あ」

笑って呆れる須藤さん。

「あ」

千尋くんも、しまった、と口を開けて、でも目は笑っていた。

——ずちゅっっ！♡♡♡

「おッ♡♡」

おちんぽがいきなり奥を突いて、背中が浮く♡♡

ずちゅッ♡♡ ずちゅうっ♡♡♡ ずちゅ、ずちゅっ♡♡

「お、お…！♡ な、なに、どういう…」

「最初は脅すつもりだったんだけど、先輩最初からけっこうノリノリで脅す必要もなかったんで♡♡」

千尋くんが体を傾けてきて、視界が暗くなった♡

ずちゅっ♡♡ ずちゅっ♡♡ ずちゅっ♡♡ ずちゅっ♡♡

「…ッ、あ、うそ♡♡ ンぁッ、あ♡♡ じゃあ、…

！」

「オレたち先輩の裏垢知ってるんですよ♡ えげつない

オナニー動画アップしてるの、ずーっと見てましたよ、
『アカリ』さん♡♡」

快感とは違う熱で顔が火照っていく♡

バしてた、匿名なのをいいことに好き勝手に欲望に忠
実なオナニーしてたの、見られてた…♡♡♡

ずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッずちゅッ！♡♡♡

ちんぽは急に乱暴に奥を突き、

ずちゅ……う♡♡♡

奥で止まった♡♡

「どうやったら先輩が気持ちよくなれるのかも勉強して
きました♡♡ 先輩のおまんこは、最初は…こうでしょ
？」

ずる…っ♡♡

「お…、♡♡」

もったいぶるようにおちんぽが引かれ♡

「ゆーっくり抜いて、ゆーっくり奥まで」

ずちゅう…っ♡♡♡

「…ッほ♡♡お♡」

壁を引きずるのを分からせるようにゆっくり奥に押し
込まれた♡♡

ずる…っ♡♡ ずちゅう…っ♡♡

ずる…っ♡♡ ずちゅう…っ♡♡

「…で、少しずつ早くするんですよね♡♡ 角度はこうかなー？♡♡♡」

ずるっ♡♡ ずちゅっ♡♡

ずるっ♡♡ ずちゅっ♡♡

「お♡お♡ おお…っ？♡」

ずる、ずちゅっ♡♡ ずる、ずちゅっ♡♡

ずる、ずちゅっ♡♡ ずる、ずちゅっ♡♡

「おおっ♡♡♡ んおッお…！♡♡♡」

「正解？♡♡ はは、生ちんぽに翻弄される先輩かわいい♡♡♡」

ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡ ずるッ、ずちゅっ！♡♡
♡ ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡ ずるッ、ずちゅっ！♡
♡♡

私の気持ちいい速さと角度で、おちんぽが動き続ける♡♡♡

「お♡ アッ、あ♡ んオおッ♡ ちんぽ、きもち…！♡♡♡」

「乳首も弱いんだろ？♡ 乳首カリカリしながら腰振る動画多いもんな～？♡♡ 今日は自分のじゃない指でいっぱいカリカリされような～♡♡♡」

上から須藤さんの指も降りてきた♡♡

つんと上を向いたままの私の乳首に爪を立て♡♡

カリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡♡

両乳首を細かく弾く♡♡

「……ふ、お…ツッ！！♡♡♡♡」

「あ————まんこ締まった♡♡ ほんとよっわ…♡♡」

ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡ ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡
ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡ ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡♡

「お…ツおおお！♡♡ んおッ♡♡待っ、お♡♡ おっお♡♡」

ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡ ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡
ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡ ずるッ、ずちゅっ！♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリッ♡♡♡♡

「ほッおおっ！♡♡ やあああ…！！♡♡♡」

二人の間で体がビチビチと跳ねる♡♡

気持ちいいやり方、バシてる二人に気持ちよくされるの、たまらない…♡♡

「パコパコもっと早くしましうねー♡♡」

「乳首も、今度は丁寧にシコってやるよ♡♡♡」

……ばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッ！♡♡

しこお♡♡ しこ、しこ、しこ♡♡ しこお♡♡しこお♡♡

「ほ♡♡ おおオおお……♡♡♡♡」

緩急をつけた責め♡♡

体がくねって、千尋くんの膝の上でおまんこをもっと押しつけてしまう♡♡♡♡

ばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッ！♡♡♡
「はー……♡♡♡ 先輩のまんこ、奥までちんこ誘い込んで離してくれなくて…♡♡♡ 可愛い♡腰とまんない♡♡」

ばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッ！♡♡♡

「はッあ♡♡あ！♡♡ きもちい♡♡♡ おちんぽきも

ちいよお！♡♡」

しこしこっ♡♡ しこ…お♡♡ しこ…お♡♡ さり
さりさり、♡♡♡

「乳首の付け根ビキってるぞ♡♡ ちゃんと乳首も意識
しろ♡♡♡ フル勃起乳首感じる♡♡♡」

しこっ♡♡しこっ♡♡さりっさりっ♡♡ しこおしこ
お♡♡♡

「き、きもち、です♡♡ ちくびそれ、されるのいい…
っ！♡♡♡♡ くすぐったいの、キくっ♡♡」

ばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッばちゅッ！♡♡♡
さり♡さり♡ しこっしこっしこっ♡♡ しこお♡♡
しこお♡♡

足の裏でしっかりとシーツに踏ん張ると、腰に力が入
り快感が増幅した♡♡

いじられる乳首を須藤さんに差し出し、おまんこ千尋
くんに向けて、さらに足を開く♡♡

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅッ！
！♡♡♡♡

誘われるように早くなるおちんぽ♡♡

しこしこしこ…っ♡♡♡ カリカリカリカリッ♡♡♡
しこお♡しこお♡ …カリカリカリッ♡♡♡

乳首は指の腹で撫で上げられ、硬い爪で勢いよく摩擦
され♡♡

「おお、おオおお、……ツツ♡♡ イきそ、です♡♡♡
♡ ツツ、ふお♡♡お♡♡♡」

「かわい…♡♡ 動画で見てた先輩の生喘ぎ声に生まん
こ♡たまないです♡♡♡ ちんこきゅんきゅんしてきたあ♡♡♡」

「イけ♡♡ 後輩ちんぽでまんこパコパコされて♡上司
に乳首コかれてイけ♡♡♡」

私は二人に見下ろされたまま、のけぞった♡♡

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅツツ！
！♡♡♡

カリカリッ♡♡ しこお♡しこお♡しこお♡ カリカ
リカリッ♡♡ カリカリカリカリッ♡♡♡♡

「お♡♡お♡♡お♡♡おっ♡♡ イきます♡♡♡まんこ
いくっ♡♡♡」

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅツツ！
！♡♡♡

しこ♡♡しこ♡♡ カリカリッ♡♡ しこしこしこ♡
♡ カリカリカリッ♡♡♡

「お♡♡ ああああッ♡♡ あ~~~~ツツ、いくっ、

いく…！♡♡♡♡」

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅッ！
！♡♡♡

ばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅばちゅッ！
！♡♡♡

「おおおおお……っっっ！！♡♡♡♡♡♡」

ガクガクガク……ッ♡♡♡♡
体が激しく震え絶頂する♡♡

どぶ…♡♡
びゅくっ♡びゅくっ♡

中で千尋くんのおちんぽが跳ねたのは同時だった♡♡

おちんぽで達する幸福感と、そのおちんぽが中で射精
する満足感♡♡

だらりと腕と足を投げ出して、私はその余韻に浸ろう
と目を閉じた♡♡

けど♡♡♡

「俺も『アカリ』ちゃんのスケベまんこ、楽しんでもいいよなあ♡♡♡」

須藤さんが私の体を抱き起こした♡

四つん這いにさせられ、頭は丸ごと前にいる千尋くんの胸に抱き込まれる♡

後ろでまたベルトの音♡♡

須藤さんがおちんぽを準備しているんだと思うと、お腹の奥がきゅん♡と熱くなった♡♡

「まんこ、すっかりとろとろだな♡♡」

体温を感じる亀頭が割れ目に当てられて♡

塗り広げるように上下している♡♡

ときどきクリトリスを掠めて体がびくつく♡♡

「ッ、あああ♡♡」

「会社の人間に挟まれてちんぽされるのそんなにいいか？♡ オナニー狂いだけでなくちんぽもこんなに好きなんて、仕事も集中できないだろ♡♡」

「……、ッ、ちが、」

ぬぷう…ッ♡♡

私の言葉を遮るように、須藤さんのおちんぽはまっすぐに押し込まれた♡♡

「違うよな、ちんぽの先にむちゅむちゅ吸い付きやがって♡♡」

「ッ、ふ、お♡♡ おおッお♡♡♡」

「須藤さんいぢわるですねー？大丈夫ですか、先輩♡♡
ああ、とろけた顔してるから大丈夫か♡♡♡」

「でも『アカリ』はいぢわるされたいんだもんな♡
『えっちなおまんこおちんぽされながらいぢわる言われたい』んだもんな～？♡♡♡」

…そんなことも、投稿したかもしれない♡♡♡

「吸盤ディルド、風呂の壁に貼り付けて『後ろから突か
れたい』って言ってただる♡♡♡」

…ぱんっ！♡♡

「んおッ♡♡」

おちんぽに体が押されて、千尋くんにしがみつく♡

■続きは製品版にて♡